

韓国ワークキャンプの体験記

橋本 菜美

2003 年の 7 月。大学2回生の夏休みを控えたいつも の韓国語の授業の終わり、私は運命の出会いをした。それはある1枚のビラだった。韓国でのワークボランティアの誘いが記載されていた。それはFIWC(フレンズ国際労働キャンプ)という、1953 年より日本の国 内外でワークキャンプを行っている団体の、韓国の ハンセン病快復者の定着村で、現地韓国の忠南大 学校の学生サークル、助産会—ジョナフェ(*KWC H)のメンバーとキャンプをしませんか?という内容で あった。私は自分を変えたい、何か新しいことにチャレンジしたいと思って勇気を出し、韓国語の先生の すすめもあり、参加することを決意した。

1年目では、ただ不安と期待を抱え、韓国人でも行 くことのないだろう山奥で3週間のキャンプをした。私 には村での生活(日本では考えられないサバイバル 的な生活内容)、初めての韓国人の友達、なれない 韓国文化、きつい労働…そして言葉の壁という5つ のストレス(未知の経験)との戦いの日々でもあった。 けれど、なれていくうちにこの村での生活も、言葉の 壁も、そして何よりも韓國の人達の温かさに感動し、 韓国が大好きになってしまった!自分でもしらなかつた新たな自分の発見にもつながった。「いい経験 したなー」と思い、帰国した。私はこの1回の経験で このキャンプを終えるつもりでいた。けれど出会った 仲間とのあの感動や雰囲気、楽しさが忘れられずも う1度、今度はそのキャンプを作ることを決意して いた。

1月。私は何気なく今年の韓国キャンプに向けての 話しあいに参加していた。このボランティアキャンプ は誰が参加しても良いもので、毎年メンバーは変わ る。30 年続いているこのキャンプも、作ろう!と立ち

上がる者が現れなければその時点で存在しなくなつ てしまう。今年は私を含め、立ち上がったのは5人の 大学生だった。

3月の終わり、私は3人の仲間と韓国へ下見に行つ た。その時には今年のキャンプ地である村の候補地 を廻り、韓国的学生達とキャンプについて話しあいを した。そして日本に帰国し、キャンプに参加する仲間 をつくるためビラを作り、それをまき、会場を借りて 説明会を行なった。これが本当に大変なものだった ★何もかも 1 からの手作り…不安と期待でいっぱい だった。仲間達と毎日メールや電話で話をし、1週 間に2回は集まっていた。それぞれが頑張ってどん どん意識を高めて、思ったことをちゃんと言えるよう になって、距離も縮まっていった。一人一人が個性 を出し、キャンプが少しずつ出来上がっていって、そ して私も変わったと思う。このキャンプでの私は、た ぶん今までで1番輝いていたと思う。それは私だけ でなく、参加した誰もがそうであった。このキャンプで は参加した人、一人一人が必要とされ、主役になれる 不思議な魅力がある。このキャンプにはボランティア、奉仕活動という目的よりも、自分自身に与えてく れ影響の方が大きいかもしれない。このキャンプに 参加した自分はちっとも偉い人間じゃなくて、村の人 のためなんかじやなく、自分の楽しみのための参加 だった。もらってきたもののほうが多い多すぎて本当に申 訳ないと思う。

夏休みを迎える 7 月の終わり、最終的に日本から の参加メンバーは 35 人になっていた。私達の作る 2004 年のキャンプ地は、韓国・慶尚南道・ハドン郡・ 永信(ヨンシン)園に決定した。新たな仲間と共に毎日 のように私達は集まり、村の方々との交流方法や、ワ ークの準備(今年は石垣積み)、船の予約、韓国側と の打ち合わせ(これが1番大変だった)などに追われ ていた。今思い返すと、悩んだり考えたりした時間の 全てが大切で愛しい。その時間に戻せるのなら戻し

て欲しい。後悔したり、やり残したことをやり直す為ではなくて、みんなと過ごした時間をもう一度味わいたい。準備をしている時間の楽しさと貴重さを感じて、私はキャンプの終わりが来るのが怖くて仕方なかつた。

いざ、キャンプが始まってしまったらヨンシン村での時間は一瞬にして過ぎてしまった。寝る時間を惜しんでも仲間と一緒にいたい気持ち、みんなが持っていたと思う。私の毎日の睡眠時間は3時間だった。毎晩のように日本人と韓国人が、言葉の壁を超えて飲み会を行っていた。その数、多い時は100人を超えていた★殆どの参加者が韓国語初心者でありながら、心を許し“チング”になっていた。朝は一緒に泥だらけ、汗まみれになって力を合わせてワークをし、夜は楽しく交流をする。それを大人も子どもも、みんなが一緒になって楽しめている。私はこの光景が日韓交流への第1歩なのだと思った。こういう小さなことが大切なのだと思う。村の人からいただく物はどれも心がこもっていて、どこか懐かしく、温かい味がした。「マシッソヨ！カムサハムニダ」としか言えない私達ではあったが、その様子を見て嬉しそうに微笑む村人の笑顔から、気持ちが通じあえていたことが分かって何よりも嬉しかった。この村に私達が来たことによって、村人に何かしらの迷惑をかけていたとは思う。でも、普段はひっそりと静まり返ったこの村が、明るく楽しい雰囲気になっていたことは確かだった。楽しかったのは私達だけではなかったことが、この村を去る時に最後までバスを見送ってくれていた村人の姿から察することができた。

あれだけ悩んで、一生懸命に半年間の全てを費やしてつくってきたキャンプ。準備をしている時や、キャンプをしていたときには感じなかつた大切なものを、私は今、感じている。時間が経つて、キャンプのことが遠い思い出になってしまふ時がきても、写真やビデ

オだけではなくて、私が感じたこの気持ちをずっと忘れずにいたいなって思う。このキャンプに参加できるのはとてもラッキーなことなのかもしれない。大切なことをいっぱい教えてもらったこのキャンプ。私のようにお金では買うことの出来ない、言葉では言い表すことのできない素敵な体験を、一人でも多くの人に経験してもらいたい。そんな思いから、今年私達の通り神戸女学院に初めて「ボランティアサポート委員会」というものを立ち上げた。今の私の新たな課題はこのキャンプに関わらず、ボランティアに参加したいと思う学生を支援していく態勢をつくることだ。この委員自体もまだまだはあるが、同じ思いを持った学生、教授と共に頑張っている。学生生活もあと1年ちょっと。有意義な時間を過ごせたらと思う。最後に、

このキャンプを私に巡りあわせてくれた運命の神様ありがとう。

私をキャンプに笑顔で送り出してくれた理解あるパパママ、ありがとう。

私にキャンプへ行くようすすめてくださった信長先生、ありがとうございます。

私たちを受け入れてくれたヨンシン村の方々、ありがとう。

キャンプをもっと楽しいものにしてくれたジョナフェのみんな、ありがとう。

大好きで大切な仲間達！言葉にできないほど色々、本当にありがとうございます。

このキャンプに関わる全ての人に感謝しています。

私のように、素敵な経験ができる新たなキャンパーが一人でも増えることを願って★

(神戸女学院大学3回生)

※9月の「むくげの会」に講師として招き、発表していただいたものをまとめてもらった。(むくげの会)